別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　　佐々木　淳

「自我漏洩症状」とは，考えや感情などの内面的情報が，意図しないのに他者に伝わってしまうと感じる心理的症状であり，対人恐怖症や統合失調症によくみられる．この症状は，加害感（他者に不快を与えているという認知）や忌避感（他者から嫌われるという認知）を伴うために心理的苦痛をもたらす．自我漏洩症状に関する研究は，思弁的な精神病理学研究が多く，実証的な多数例研究は少なかった．自我漏洩症状は，病理群にみられるだけでなく，弱いものであれば，健常者にもみられる．これを本研究では「自我漏洩感」と呼ぶ．本研究は、大学生の自我漏洩感について実証的に研究したものである．青年後期は精神疾患の好発年齢にあたるため，自我漏洩感について調べることは、大学生への心理的援助を考える上からも意義深い．本研究は７つの研究からなるが、大きく二部に分けられる．第一部は、自我漏洩感の測定尺度を開発し，大学生における実態を調べたものである．第二部では、自我漏洩感による苦痛の発生メカニズム及び苦痛の維持プロセスについて明らかにしたものである．

第一部の研究１では，これまでの精神病理学研究を参考に，自我漏洩感尺度を作成した．精神科医に対し統合失調症と社会恐怖症についての診断的重要度の評定を求め，この尺度の妥当性を確かめた．また，大学生を対象にこの尺度を実施したところ，多くが自我漏洩感を体験していた．大学生における自我漏洩感の研究の重要性が確認された．

研究２では，自我漏洩感を感じる状況を体系的に調べた．予備調査と因子分析の結果にもとづいて，５つの下位尺度からなる自我漏洩感状況尺度を作成した．信頼性・妥当性は高く，4つの下位尺度で体験率が60％を越えていた．ここでも，多くの大学生が自我漏洩感を体験していることが確かめられた．

研究３では，自我漏洩感の生じる状況について，自分と他者の心理的距離と自我漏洩感の関係を調べた．その結果、自我漏洩感・羞恥感と心理的距離の間には逆U字的関係があることが示された．また，逆U字的関係は「拒否回避欲求」と「自己イメージ損傷度」の２つの要因の積によって予測できることが明らかになった．

第二部の研究４では，自我漏洩感による苦痛がどのような態度から生じるかについて検討した．自我漏洩感は一定の状況に出会うことによってだれでも生じるものであるが，その際，「特有な態度」を持っている人は自我漏洩感にネガティブな意味付けをしてしまうので，苦痛を感じてしまうと予測された．こうしたモデルの妥当性を検討するため，研究 4-1 では横断的調査をおこなった．臨床研究などを参考にして選んだ５つの態度を独立変数とし，研究２で得られ

た５つの状況における自我漏洩感の苦痛度を従属変数とした重回帰分析を行なった．その結果，各状況において，それぞれ異なる態度が苦痛度を予測していたが，「加害感」という態度は５つの状況すべての苦痛度を予測した．また、研究 4-2 では縦断調査を行なった．上述の態度を持つ人が，「赤面・動揺」状況と「苦手な相手」状況を体験することで，自我漏洩感の苦痛度が強まるかについて，階層的重回帰分析を用いて検討した．その結果，一定の態度を持つ人が「赤面・動揺」状況を体験することで，自我漏洩感の苦痛度が強まることがわかった．これに対し，「苦手な相手」状況については，「苦手な相手」状況を体験することは，態度に関係なく，自我漏洩感の苦痛度を強めていた．自我漏洩感をもたらす状況によって，苦痛をもたらすメカニズムは異なることが明らかになった．

研究５では，自我漏洩感の苦痛をもたらす加害感について検討した．その結果，大学生における加害感の頻度は高く、また，加害感と忌避感の相関は非常に高いことが明らかになった．

研究６では，自我漏洩感の苦痛に対する対処行動について検討し、８つの下位尺度からなる自我漏洩感対処方略尺度を作成した．各下位尺度の信頼性はおおむね良好であり，妥当性に関しても良好であることが確かめられた．

研究７では，自我漏洩感の苦痛がなぜ維持されるのかについて，対処方略という観点から調べた．縦断調査をおこない，第一調査の自我漏洩感対処方略尺度の８つの下位尺度を独立変数とし，２週間後の第二調査の自我漏洩感の苦痛度を従属変数とする重回帰分析をおこなった．その結果，「気晴らし」の対処方略は自我漏洩感の苦痛を鎮静化させることが明らかになった．これに対し，「怒り」などの対処方略は，これらの対処法は自我漏洩感の苦痛を維持・増強していた．

以上の研究は全て倫理的配慮のもとに行われていることが確認された．

本研究においては特に次の３点が高く評価された．

１）臨床的に重要な概念とされてきた自我漏洩感について、体験頻度・発生状況・対処行動など包括的に測定でき、かつ信頼性と妥当性の高い尺度を新たに開発したこと．大学生の自我漏洩感の頻度を明らかにし，健常者における自我漏洩感の実証的研究の基盤を確立したこと．

２）従来行なわれてきた横断調査の枠を超えて縦断調査を積極的に取り入れ，自我漏洩感がどのように苦痛な体験となるのか，どのように苦痛が持続するかについて，因果にふみこんで記述することができたこと．

３）こうした実証研究を積み上げることによって、自我漏洩感の苦痛度を下げる治療や早期介入に役立つ確実な情報を提供したこと．

これらの成果により，本論文は博士（学術）の学位に値するものであると審査員全員が判定した．